

満たされぬ想い

お日さまが山間から俗世を照らし

私の目輪の輝きはかすむ

初夜の火炎はいずこへ

あの日の想いは天に帰した

深淵なる虚無を埋められず

私は一人さまよい彼と会う

麝香の香りが鼻腔をつく空間で

私はあなたを知る

それは本当のあなたではない

肢体を着飾り

花の都を歩いても高閣の輝きはむなしくて

美食の味わいも、心ここにあらず

私の想いはいずこへ

私の想いはいずこへ

一滴の涙が目尻から頬を伝い、地を濡らす

涙を知った大地は、

晩夏の風に吹かれ渴きをおぼえる

深淵な器を満たせるのはあなただけ

この大炎が燃え尽きる前に

私はもう一度あなたを知りたい

解説

この詩は、ある女性が結婚まで考えていた男性を失い、その埋められない心の叫びを表現したものです。季節は、夏の終わり、年齢は20代後半、結婚ラッシュに乗り遅れまいと、必死さを心に抱えていた女性です。彼女は、彼氏を失ってから別の男性と知り合います。しかし、彼では彼女の心にはぽっかりあいた穴を埋めることができないのです。その彼はリッチな方です。世界中のどこへでも彼女を連れて行き、おいしい食事を紹介します。しかし、彼女の心は沈んだままです。

彼女は着飾りますが、ダイヤ、プラチナの輝きは、

外国語学部

国際文化交流学科4年

斎藤 瑞生

都市の夜景のごとく、はかなく、到底彼女のところを満たすことはできません。本当の彼と過ごした日々が、一歩踏み出すたびに思い起こされます。

乾ききった彼女の心から絞り出たのが、涙です。その涙は大地に落ちますが、夏の風に吹かれすぐ乾きます。まるで彼女の心のように。彼女が必要としている唯一のものは本当の彼なのです。